

初経産婦別の出産場所別にみた産む人の意識、行動と選択基準

小林 正子 渡邊 典子

新潟青陵大学看護学科

The sense, behaviors and standard of selection of women in childbed considering the difference of the place for childbirth and the existence of the experience of childbirth

Masako Kobayashi Noriko Watanabe

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF NURSING

Abstract

The sense, behaviors and standard of selection of women in childbed considering the difference of the place for childbirth and the existence of the experience of childbirth

We investigate the modern women who are going to bear a child at hospital, clinic, or clinic without doctor but with mid-wife, before childbirth and after childbirth, to clear the cause of the selection of the place for childbirth and the sense and behavior to childbirth.

The results show that both of inexperienced and experienced pregnant women choose hospital and clinic considering conveniently location, substantial facility and reputation.

The image for childbirth is more negative before child bearing.

And during childbirth, people who choose hospital are negative, and people who choose clinic are positive.

People who choose clinic without doctor but with mid-wife, choose the facility by matters concerning childbirth preferentially.

The image for childbirth is positive before childbirth and during childbirth, the posture is positive also.

Key words

Childbed sense behavior

要 旨

現代女性の出産場所別の選択要因と出産に対する意識と行動を明らかにすることを目的に、病院、診療所、助産所で出産する女性を対象に、出産前と出産後に調査をした。その結果、初・経産婦ともに、病院選択者、診療所選択者は、立地条件や施設の充実、評判で選択していた。出産に対するイメージについて、出産前は否定的イメージが高かったが、病院選択者は、出産中において消極的、診療所選択者は主体的であった。助産所選択者は、出産方法に関することを優先して施設を選択し、出産に対するイメージは、出産前は肯定的イメージ、出産中は主体的姿勢であった。

キーワード

出産場所 意識 行動

はじめに

日本において、第2次世界大戦後（1947年）出産の場所は、自宅出産が97.6%を占めていた。しかし、1950年代から施設での出産が急増し、1960年に自宅出産が49.9%、施設内出産が50.1%とほぼ同じ割合になった。その後施設内出産が90%台になったのは1967年で、1990年に99.9%になった。それ以降施設内出産は99.8～99.9%を維持している。

病院施設における医学的管理下での出産は、何といても世間に安全性を保証し、清潔でさまざまな設備が整っているという認識を与えた。病院での出産は、医療介入により安全を保証し、母子保健に大きく貢献した。しかし、安全なはずの管理出産は、過剰な医療介入によりさまざまな弊害をもたらした。やがて、それらは社会問題化し、いき過ぎた管理出産に対する提言がなされた。

1975年頃、外国から自然出産法であるラマーズ法が到来した。ラマーズ法は、産む女性の人間性の尊重という思想に後押しされ、その時代に求められるべくして日本全国に急速に広まっていった。このラマーズ法と前後して、藤田は医学的管理下で行われている出産やラマーズ法を取り入れた自然出産を取材した。1979年に『お産革命¹⁾』を出版して、その時代の出産事情に潜む問題を世に示した。また、同年に産む側の女性による出産の実態調査に基づく『出産白書²⁾』が発行された。この調査は病院出産の実態と、女性の不安や不満が示されていた。このような出産の問題や不満は、個人の体験として語られ、医学的管理出産の実態と問題が人々の前に明らかにされ、社会の問題としてとらえられるようになった。1980年代からは出産体験者の告発や提言が続出した。その後、1980年後半から1990年にかけては自然出産志向の風潮が広がり始めた。やがて、不必要な医療の介入を受けない自然経過を重要視し、自分の満足する出産に向けて主体的な姿勢で望む女性や団体が出てきた。

現代は女性の社会進出の増加、生涯未婚率の上昇、そして平成17年の合計特殊出生率は1.25と少子化の時代である。この時代に産む

ことを選択した女性は、出産体験を自分のライフサイクルの中で一大イベントとして位置づける傾向にある。女性が満足する出産をするには、出産場所の選択も重要な要因である。それとともに、出産に対する意識や行動のあり方が満足度の上昇につながる。そこで、現代の女性がどのような意識と行動で出産場所を選択し、出産に臨もうとしているのか、また出産後、出産に対して意識の変化があったかどうかについて調査、分析した。

研究方法

1. 調査期間

平成17年6月から平成18年1月

2. 調査対象

N市内の総合病院（以下病院とする）で出産する初産婦15人と経産婦15人（合計30人）、アクティブバースを取り入れた診療所で出産する初産婦15人と経産婦15人（合計30人）、助産所で出産する初産婦4人と経産婦6人（合計10人）を対象にした。

アクティブバースを取り入れた診療所を対象とした理由は、次の2つである。現在施設内出産は99.8%であるうち、病院と診療所の割合が約半々であること。アクティブバースを取り入れることによって、妊産婦の主体性を発揮でき、その一方で、医師がいて産科医療がすぐに受けられるという、病院と助産所2つの要素を兼ね備えているからである。

3. 調査方法

出産前は、妊娠28週以降に質問紙を渡し、外来の待ち時間を利用して記入してもらった。出産後は、産褥2日目以降に病室を訪問し、質問紙を用いて聞き取り調査を実施した。

4. 倫理的配慮

調査対象者には、書面と口頭により研究目的と方法および本研究への協力により、不利益が生じないことを説明し、本研究参加への承諾を得た。同時に、収集したデータは本研究以外の目的以外には使用しないことを説明した。質問紙は記入後、事前に準備した封筒に入れてもらって回収し、プライバシーが守られるようにした。

表1 対象者の属性

		初産婦 n = 34			経産婦 n = 36		
		病院 n=15	診療所 n=15	助産所 n=4	病院 n=15	診療所 n=15	助産所 n=6
年齢(歳)	最小	22	25	24	25	23	29
	最大	41	36	34	37	36	34
	平均	29.9	30.1	27.8	30.1	31.1	31.3
	標準偏差	5.6	3.1	3.0	3.8	3.6	2.1
出産様式	自然分娩	11	14	4	10	15	6
	帝王切開	4	0	0	5	0	0
	吸引分娩	0	1	0	0	0	0
前回出産様式	自然分娩				15	15	6
	その他				0	0	0
前回出産場所	病院				14	15	5
	診療所				1	0	1
	助産所				0	0	0

・研究結果

1. 対象者の属性(表1)

平均年齢については、初産婦において、病院は29.9歳、診療所30.1歳、助産所27.8歳であった。経産婦においては、病院は30.1歳、診療所31.1歳、助産所31.3歳であった。

出産様式については、初産婦において、病院は自然分娩11人、帝王切開4人、診療所は自然分娩14人、吸引分娩1人、助産所は全員自然分娩であった。経産婦においては、病院は自然分娩10人、帝王切開5人、診療所と助産所は全員自然分娩であった。

経産婦の前の出産方法と前回の出産場所については、前回の出産方法は病院、診療所、助産所とも全員自然分娩であった。前回の出産場所については、病院では、病院で出産した人14人、診療所で出産した人1人、診療所では、全員病院での出産であった。助産所では、病院で出産した人5人、診療所で出産した人1人であった。

これ以降の結果については、初産婦、経産婦について出産場所別に述べる。

2. 出産前後の出産に対するイメージ、希望、姿勢について

1) 出産のイメージ(前後)(図1.2)

出産前のイメージについて、初産婦において、病院は「痛いもの」が66.7%、「大変な仕事」と「自然なこと」46.7%、「大変そうで不安」40%、診療所は「痛いもの」66.7%、「大

変な仕事」46.7%、「自然なこと」40%、助産所は「自然なこと」100%、「神秘的」50%であった。経産婦において、病院は「痛いもの」80%、「大変な仕事」53.3%、「大変そうで不安」「神秘的」「自然なこと」46.7%、診療所は「痛いもの」77.3%、「大変そうで不安」「神秘的」「女性としての誇り」46.7%、「大変な仕事」33.3%、助産所は「神秘的」「自然なこと」66.7%、「痛いもの」「女性としての誇り」50%、「大変な仕事」33.3%であった。

出産後のイメージについて、初産婦において、病院は「痛いもの」「大変な仕事」80%、「神秘的」46.7%、「女性としての誇り」40%、診療所は「大変な仕事」80%、「女性としての誇り」60%、「神秘的」53.3%、助産所は「自然なこと」「神秘的」100%、「女性としての誇り」50%であった。経産婦において、病院は「痛いもの」86.7%、「大変な仕事」60%、「自然なこと」46.7%、診療所は「痛いもの」80%、「大変な仕事」「神秘的」53.3%、「女性としての誇り」40%、助産所は「神秘的」83.3%、「自然なこと」66.7%、「女性としての誇り」50%であった。

2) 出産前の出産に対する希望と出産後の気持ち(図3.4)

出産前の出産に対する希望について、初産婦において、病院は「不安がない出産」「気持ちに余裕がある出産」40%、「女性でよかったと思える出産」20%、診療所は「不安がない出産」40%、「気持ちに余裕がある出産」「女性でよかったと思える出産」26.7%、助産

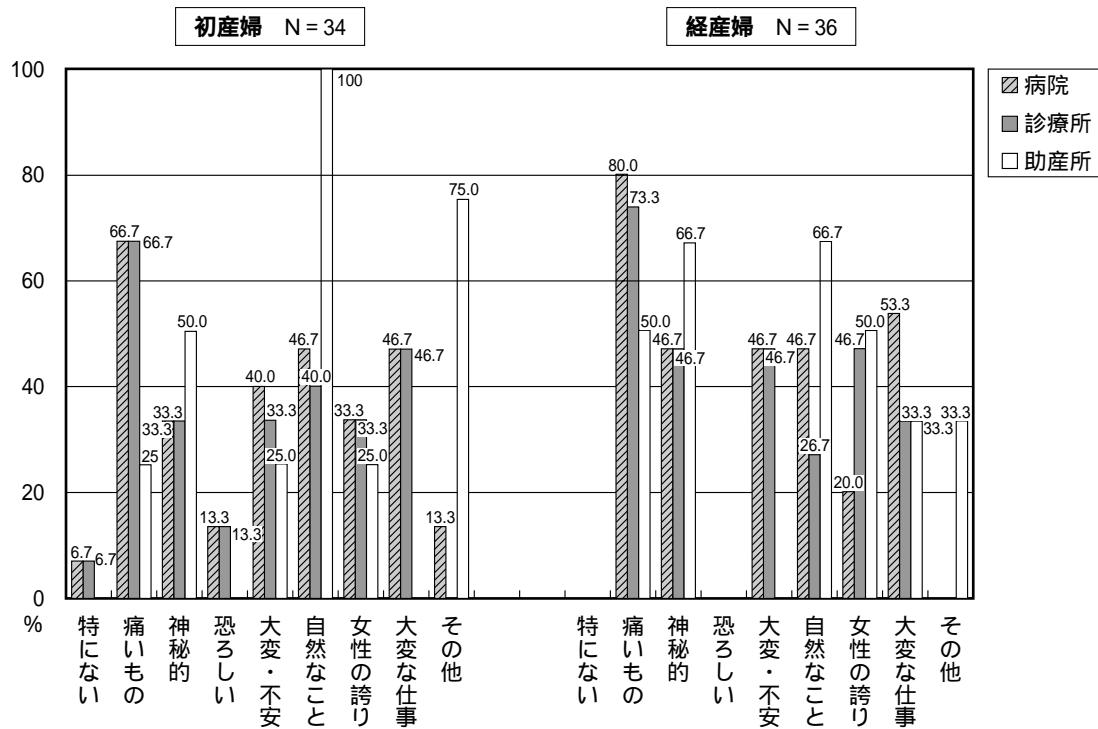


図1 出産前のイメージ(3つ選択)

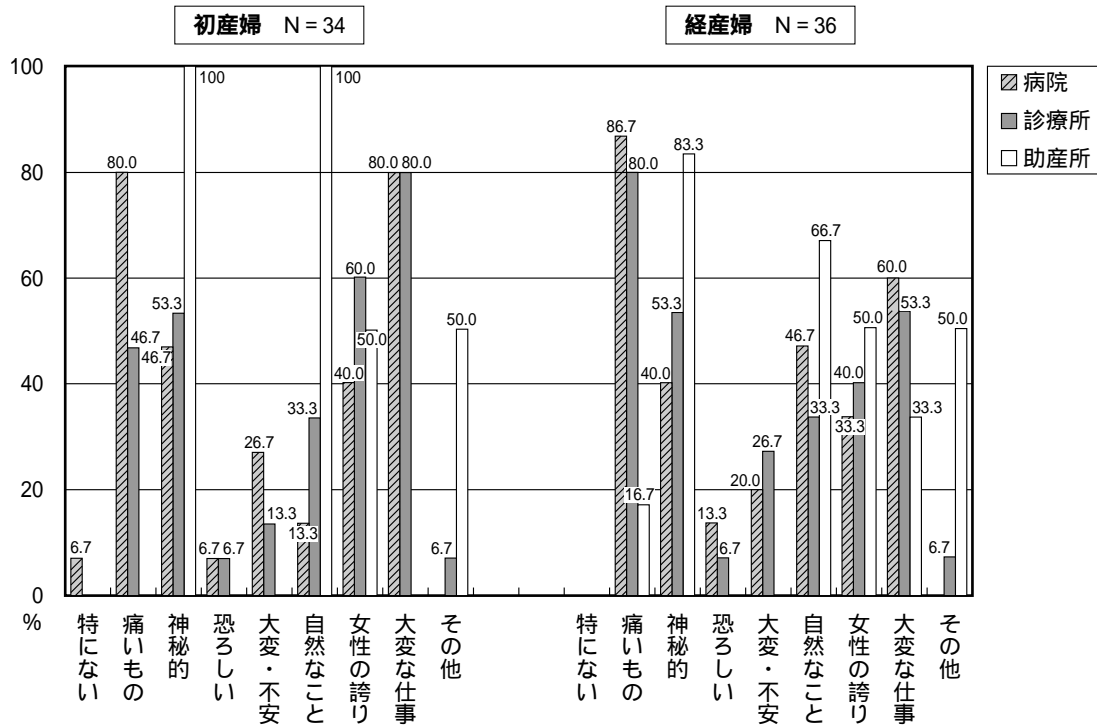


図2 出産後のイメージ(3つ選択)

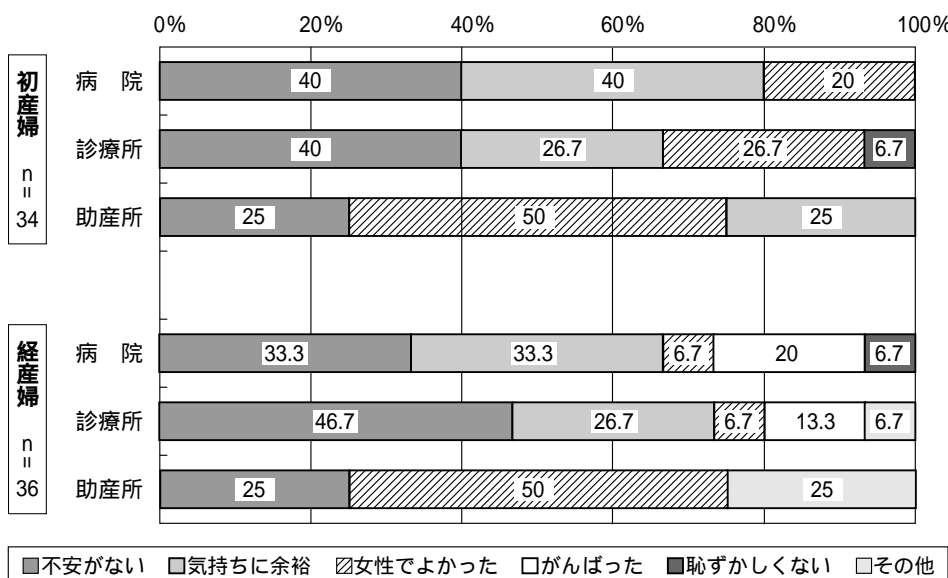


図3 出産前の出産に対する希望

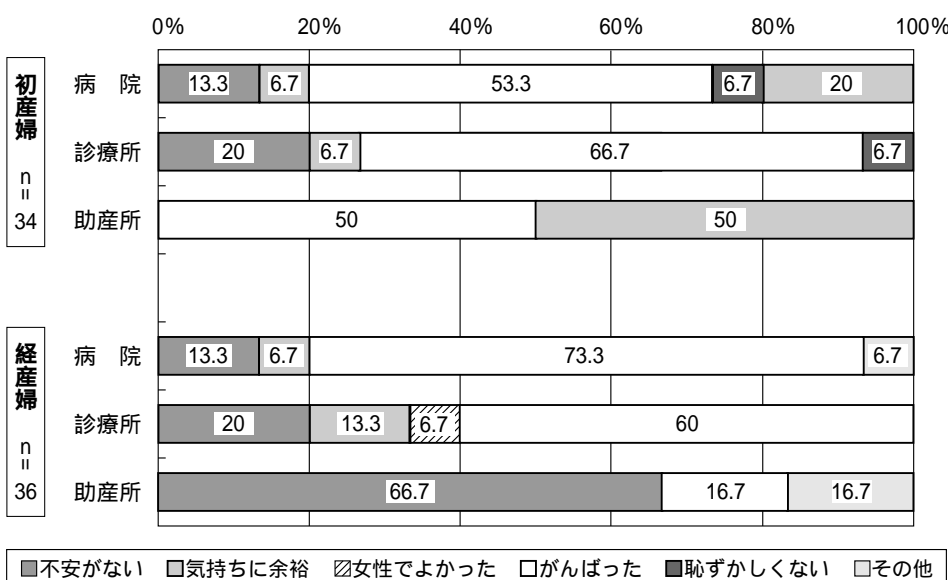


図4 出産後の気持ち

所は「女性でよかったと思える出産」50%、「不安がない出産」25%であった。経産婦において、病院は「不安がない出産」「気持ちに余裕がある出産」33.3%、「がんばったと思える出産」20%で、診療所は「不安がない出産」46.7%、「気持ちに余裕がある出産」26.7%、「がんばったと思える出産」13.3%、助産所は「女性でよかったと思える出産」50%、「不安がない出産」25%であった。

出産後の出産に対する気持ちについて、初

産婦において、病院は「がんばった出産だった」53.3%、「不安がない出産だった」13.3%、診療所は「がんばった出産だった」66.7%、「不安がない出産だった」20%、「気持ちに余裕がある出産だった」「恥ずかしくない出産だった」6.7%、助産所は「がんばった出産だった」50%であった。経産婦において、病院は「がんばった出産だった」73.3%、「不安がない出産だった」13.3%、「気持ちに余裕がある出産だった」6.7%で、診療所は「がんばっ

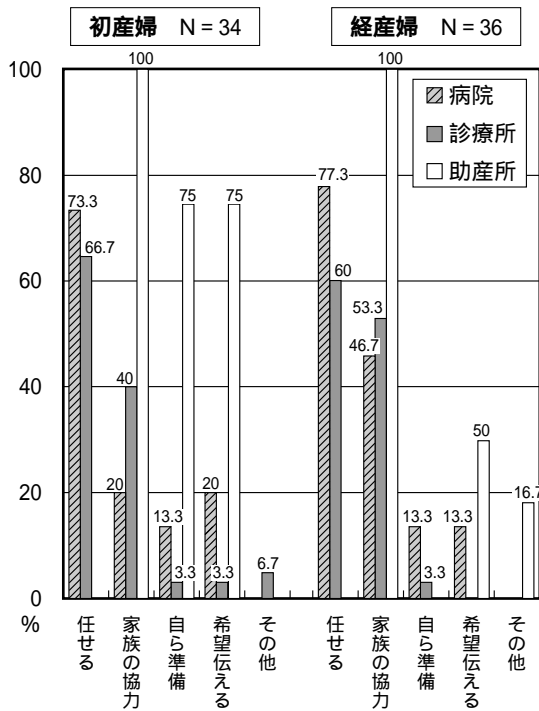


図5 出産前の出産に臨む姿勢（複数回答）

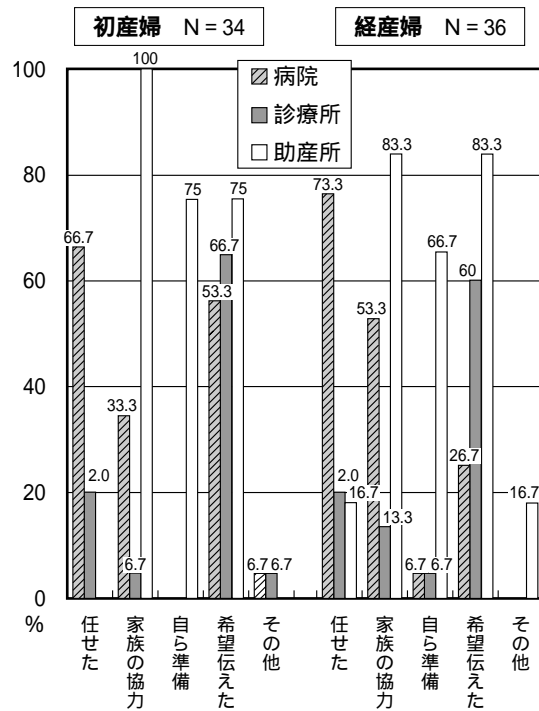


図6 出産時の姿勢（複数回答）

た出産だった」60%、「不安がない出産だった」20%、「気持ちに余裕がる出産だった」13.3%の順、助産所は「不安がない出産だった」66.7%、「がんばった出産だった」16.7%であった。

3) 出産前の出産に臨む姿勢と出産時の姿勢（複数回答）(図5.6)

出産前の出産に臨む姿勢について、初産婦において、病院は「任せる」73.3%、「家族の協力を得る」「希望を伝える」20%、「自ら準備する」13.3%、診療所は「任せる」66.7%、「家族の協力を得る」40%、助産所は「家族の協力を得る」100%、「自ら準備する」「希望を伝える」75%であった。

経産婦において、病院は「任せる」77.3%、「家族の協力を得る」46.7%、「自ら準備する」「希望を伝える」13.3%で、診療所は「任せる」60%、「家族の協力を得る」53.3%、「自ら準備する」3.3%、助産所は「家族の協力を得る」100%、「希望を伝える」50%であった。

出産時の姿勢について、初産婦において、病院は「任せた」66.7%、「希望を伝えた」53.3%「家族の協力を得た」33.3%、診療所は「希望を伝えた」66.7%、「任せた」20%、「家

族の協力を得た」6.7%、助産所では「家族の協力を得た」100%、「希望を伝えた」「自ら準備した」75%であった。経産婦において、病院は「任せた」73.3%、「家族の協力を得た」53.3%、「希望を伝えた」26.7%、診療所は「希望を伝えた」60%、「任せた」20%、「家族の協力を得た」13.3%、助産所は「家族の協力を得た」「希望を伝えた」83.3%、「自ら準備した」66.7%であった。

3. 希望する出産の種類と出産時の希望体位について

1) 希望する出産の種類(図7)

初産婦、経産婦ともに、またどの施設も「自然分娩」が最も多かった。

2) 出産の希望体位(図8)

初産婦において、病院では「出産になってみないとわからない」46.7%、「仰臥位」33.3%、「考えていない」20%、診療所は「出産になってみないとわからない」60%、「仰臥位」13.3%、「四つん這い」6.7%、助産所「出産になってみないとわからない」100%であった。

経産婦において、病院では「仰臥位」46.7%、「考えていない」33.3%、「出産になっ

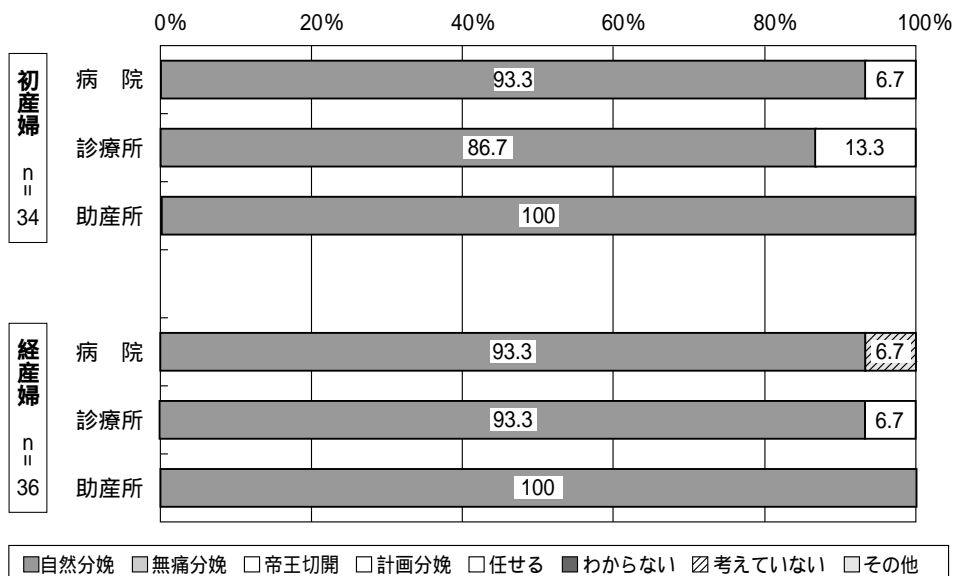


図7 希望する出産の種類

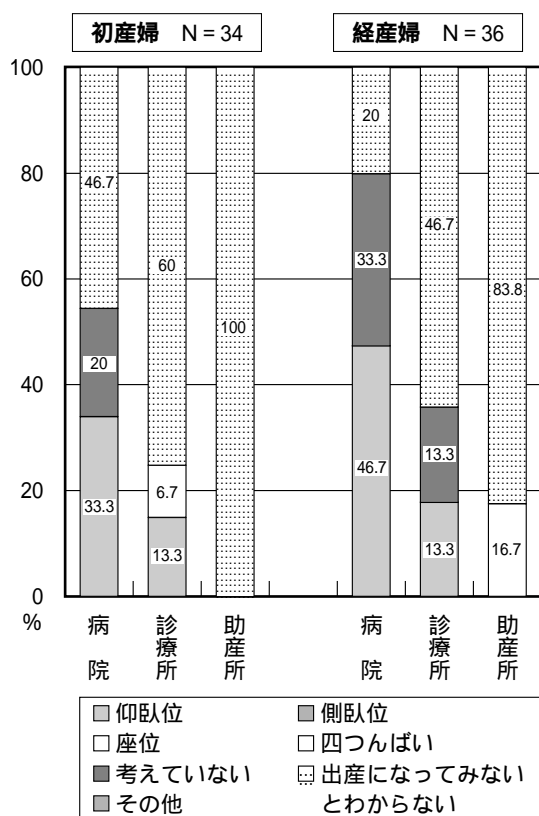


図8 出産時の希望体位

てみないとわからない」20%、診療所は「出産になってみないとわからない」46.7%、「仰臥位」「考えていない」13.3%、助産所は「出産になってみないとわからない」83.3%、「四つん這い」16.7%であった。

4. フリースタイル出産の知識の有無について
初産婦において、病院では「知っている」60%、「知らない」40%で、診療所は「知っている」66.7%、「知らない」33.3%、助産所は「知っている」100%であった。

経産婦において、病院は「知っている」60%、「知らない」40%、診療所「知っている」53.3%、「知らない」46.7%、助産所は「知っている」100%であった。

5. 出産場所の選択理由と情報収集源について

1) 出産場所の選択理由 (3つ選択)
(図9.10)

初産婦において、病院は「近い」が86.7%、「家族の勧め」40%、「施設が充実」26.7%であった。診療所は「評判がよい」73.3%、「近い」60%、「施設が充実」40%であった。助産所は「立会い出産ができる」75%、「医療者が親切」「自然分娩ができる」「自分で考えた出産ができる」「友人の勧め」が50%であった。経産婦において、病院は「近い」93%、「前回出産した」46.7%、「評判がよい」33.3%、「医療者が親切」26.7%、「緊急に対応できる」「友人の勧め」20%であった。診療所では「近い」66.7%、「友人の勧め」46.7%、「評判がよい」「施設が充実」40%、「立会い出産ができる」33.3%であった。助産所は「考えた

初産婦別の出産場所別にみた産む人の意識、行動と選択基準

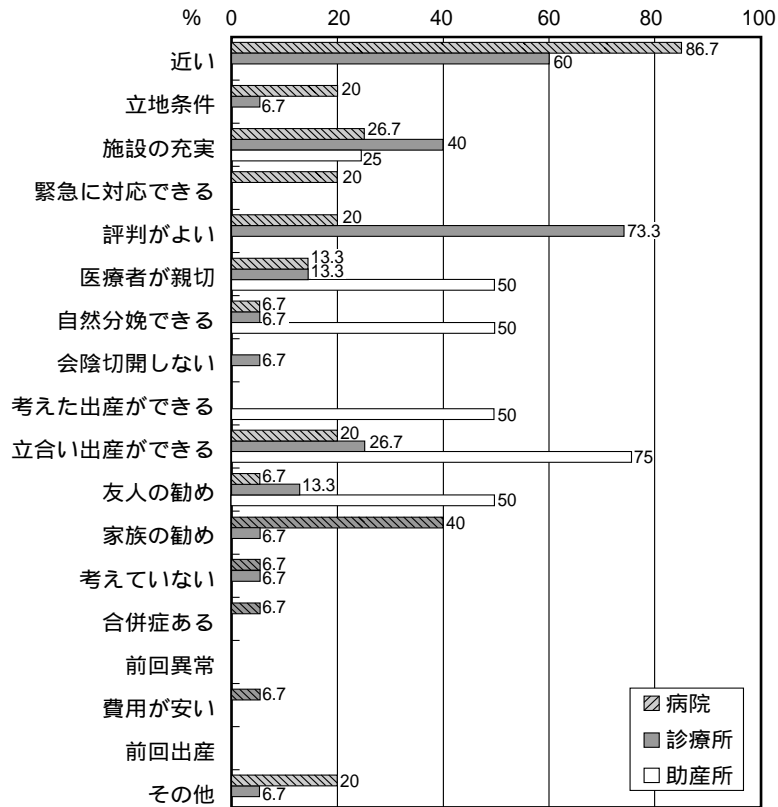


図9 出産場所の選択理由(初産婦) 3つ選択 N = 34

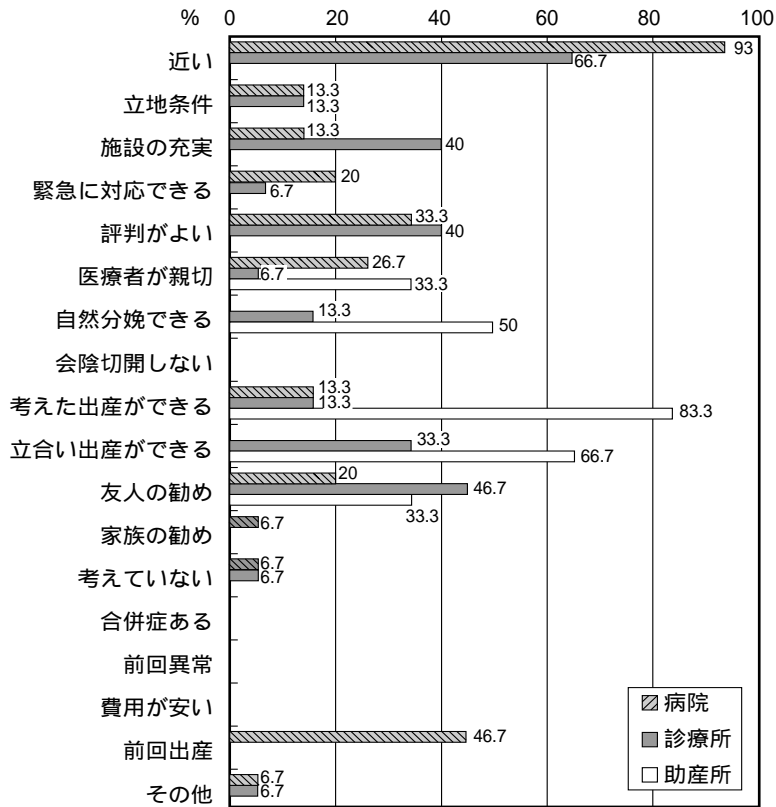


図10 出産場所の選択理由(経産婦) 3つ選択 N = 36

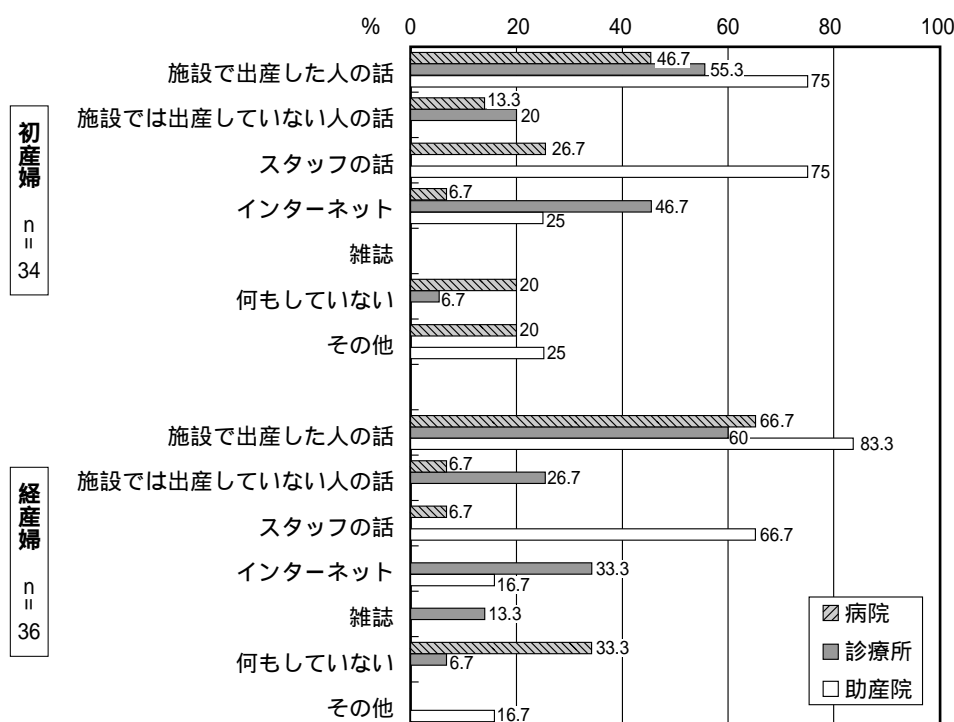


図11 出産場所選択のための情報収集手段（複数回答）

出産ができる」83.3%、「立会い出産ができる」66.7%、「自然分娩ができる」50%、「医療者が親切」「友人の勧め」33.3%の順であった。

2) 施設選択のための情報収集源について (複数回答)(図11)

初産婦において、病院は「その施設で出産した人の話を聞いた」46.7%、「スタッフの話を聞いた」26.7%、「何もしていない」20%であった。診療所は「その施設で出産した人の話を聞いた」53.3%、「インターネット」46.7%、「その施設では出産していない人の話を聞いた」20%であった。助産所は「その施設で出産した人の話を聞いた」と「スタッフの話を聞いた」75%、「インターネット」25%であった。経産婦において、病院は「その施設で出産した人の話を聞いた」66.7%、「何もしていない」33.3%、「その施設では出産していない人の話を聞いた」と「スタッフの話を聞いた」6.7%の順、診療所は「その施設で出産した人の話を聞いた」60%、「インターネット」33.3%、「その施設では出産していない人の話を聞いた」26.7%の順、助産所は「その施設で出産した人の話を聞いた」83.3%、「スタッフの話を聞いた」66.7%、「インターネット」16.7%であった。

・考察

1. 出産に対するイメージ、希望、姿勢について

1) 出産に対するイメージ

初産婦、経産婦ともに、病院では出産前は否定的なイメージが大きく、出産後はさらに否定的イメージが増加していた。診療所では出産前は否定的なイメージが大きかったが、出産後は否定的イメージに加え、肯定的なイメージが増加した。助産所では、出産前は肯定的イメージが大きく、出産後はさらに増加した。このことから、初産婦、経産婦ともに、病院を選択した人は最も否定的イメージが大きく、助産所を選択した人は最も肯定的イメージが大きかった。江守らの調査によると、「出産に対するイメージは、病院（診療所も含む）の初産・経産ともに違いがあり、助産所の妊婦は初産婦のイメージが最も否定的でなく、自力で自然に産むことを望んでいる」と報告している。本調査においては、病院と診療所は、初産婦、経産婦どちらも否定的なイメージが最も大きく、助産所では初産婦の方が肯定的イメージが大きかった。診療所では、アクティブバースを取り入れ、助産所と

同じスタイルの出産ができて、出産前は病院と同様に否定的イメージが大きかった。

2) 出産前の出産に対する希望と出産後の気持ち

初産婦において、病院では出産前は「不安がない出産」「気持ちに余裕がある出産」の希望が多く、出産後は「がんばった出産だった」が多かった。診療所では「不安がない出産」の希望が多く、出産後は「がんばった出産だった」が多かった。助産所では「女性でよかったと思える出産」の希望が多く、出産後は「がんばった出産だった」が多かった。これらのことから、初産婦で病院と診療所を選択した人は、不安のない出産をしたいという希望が大きく、出産後は達成感が大きかった。助産所を選択した人は「女性でよかったと思える出産」に対する期待が大きく、出産後は病院、診療所と同様に達成感が大きかった。経産婦においては、病院では出産前は「不安がない出産」「気持ちに余裕がある出産」の希望が多く、出産後は「がんばった出産であった」が最も多かった。診療所では、出産前は「不安がない出産」の希望が多く、出産後は「がんばった出産だった」が多かった。助産所では、出産前は「女性でよかったと思える出産」の希望が多く、出産後は「不安がない出産であった」が多かった。これらのことから、経産婦で病院と診療所を選択した人は、初産婦と同様に、不安のない出産をしたいという希望が大きく、出産後は達成感が大きかった。助産所を選択した人は、出産前は「女性でよかったと思える出産」に対する期待が大きく、出産後は不安がない出産が多く、すなわち安心感のある出産ができた。大井らは病院、診療所、助産所の初産婦、経産婦ともに「不安がない出産」「気持ちに余裕がある出産」を希望していると報告している。本調査では病院と診療所では初産婦、経産婦どちらも「不安がない出産」「気持ちに余裕がある出産」を希望する人が多く、助産所は「女性でよかったと思える出産」を希望する人が多く出産場所別の差がみられた。

3) 出産前の出産に臨む姿勢と出産時の姿勢

初産婦、経産婦ともに、病院では出産前は「任せる」が最も多く、出産時も「任せた」が最も多かった。診療所では出産前は「任せる」が最も多く、出産時は「希望を伝えた」が最も多かった。助産所では、出産前は「家族の協力を得る」が最も多く、次に「希望伝える」が多かった。出産時は「自ら準備した」が増加した。これらのことから、病院を選択した人は、出産前後を通し「任せる」「任せた」という相手に依存する姿勢、診療所では出産前は「任せる」から出産時は「希望を伝えた」という、自分の出産への希望を伝える姿勢がみられた。これは、今回の調査対象である診療所は、アクティブバースを取り入れていることから、産婦が自分の希望を伝えられる環境が整備されていたからだと考える。助産所を選択した人は、相手に依存の姿勢はなく、家族の協力を得ながら、自らの意思で行動していた。大井らの調査によると、出産に対する態度では「任せる」「家族の協力」「希望を伝える」「自ら準備」の順に多く、「希望を伝える」行動は病院や診療所よりも助産所で産む人の方が多い。また、助産所では、分娩に対する主体的なかかわりを持つとする妊婦像があると報告している。本調査では、出産前の姿勢については、初産婦、経産婦ともに、病院と診療所が「任せる」姿勢が多く、助産所では「希望を伝える」行動が最も多かった。出産に対する主体性は、大井らの調査と同様であった。

2. 希望する出産の種類と出産時の希望体位について

1) 希望する出産の種類

初産婦、経産婦ともに、病院と診療所では「自然分娩」の希望が最も多く、助産所では全員「自然分娩」を希望していた。これらのことから、初産婦、経産婦ともにどの施設も自然分娩を希望していることがわかった。二瓶らの調査によると「初産婦、経産婦ともに90%以上の人⁵⁾が自然分娩を希望し、初産婦と経産婦による違いはないが、病院よりもその他の場所を選択している人の方が自然分娩に

対する意識が高かった」と報告しており、本調査も同様の結果であった。

2) 出産時の希望体位

初産婦は、どの施設も「出産になってみないとわからない」が最も多かった。これは出産が初めての体験であることから、出産の進行状況によって体位も変化するという意識の現れだと考える。経産婦の出産の希望体位については、病院では「仰臥位」が最も多かった。診療所と助産所では「出産になってみないとわからない」が最も多かった。早川らは60%以上の妊婦は分娩体位について、意識していないか、自分の意思を持っていないと報告している。本調査では「考えていない」は、病院の初産婦20%、経産婦33.3%、診療所の経産婦13.3%という結果であり、早川の調査に比べ少なかった。

3. フリースタイルの知識の有無について

フリースタイルの知識の有無についてみると、知識のない人は病院、診療所の順に多く、反対に助産所では全員フリースタイル出産の知識をもっていた。つまり、助産所はフリースタイルに対する意識は高いが、病院と診療所はフリースタイルに関する意識が低いといえる。助産所を選択した人は、フリースタイルの知識をもとに、出産の進行状況に合わせて、その都度体位を変更して出産に臨むという主体的出産への準備が備わっているとも考えられる。

4. 出産場所の選択理由と情報収集源について

1) 出産場所の選択理由

初産婦、経産婦どちらも、病院と診療所では「立地条件」と「施設の充実」「評判」などが多く、助産所では、「立会い出産ができる」や「考えた出産ができる」「自然分娩ができる」などの理由が多かった。これらのことから、初産婦、経産婦ともに病院・診療所選択の最大の理由は、立地条件や施設の充実、評判などの施設に関することであり、助産所は出産方法に関することであった。渡部らの調査によると、出産施設の選択理由順位は次のような結果であった。一般病院は「近い」

「大きい」「評判」の順、医院は「評判」「近い」「医療者の対応」の順、助産所は「お産のやり方」「母児同室」「医療者の対応」の順であった。本調査もほぼ同様の結果であったと考える。

2) 出産場所選択のための情報収集手段について

初産婦、経産婦ともに、病院・診療所・助産所における情報源は、「その施設で出産した人の話」が一番多かった。これは、実際に体験した人の話は、施設を決定するにあたって最も重要なものと考えられる。

・まとめ

現代女性の出産に対する意識を明らかにすることを目的に、出産場所別の選択要因と出産に対する意識と行動を調査、分析した。初産・経産別、施設別に比較検討した結果については次のとおりであった。

1. 初産婦について

1) 出産場所別に違いがあった項目以下のとおりであった。

出産に対するイメージ	出産に対する姿勢	フリースタイルの知識の有無	出産に対する希望と出産後の気持ち
施設選択理由			

2) 施設別に違いがなかった項目は以下のとおりであった。

希望する出産の種類	出産体位
出産施設に関する情報源	

2. 経産婦について

1) 出産場所別に違いがあったものは以下のとおりであった。

出産に対するイメージ	出産に対する姿勢	フリースタイルの知識の有無	出産に対する希望と出産後の気持ち
出産時の体位	施設選択理由		

2) 施設別に違いがなかったものは以下のとおりであった。

希望する出産の種類	出産施設に関する情報源
-----------	-------------

．おわりに

妊産婦にとって出産の理想像は「安心、安全、満足」である。大多数の出産は正常に進行する。しかし、出産は急激に変化することもあり、それに対応できる十分な医療体制を社会システムとして整えることが必要である。助産師と医師は、出産に関し協力し合い、出産の理想像である「安心、安全、満足」をつくりあげる責任がある。つまり、チームという意識をもち、メンバーシップを発揮することで妊産婦の願望にこたえなければならない。

引用文献

- 1) 藤田真一、お産革命、東京都：朝日文庫；1988
- 2) 国際婦人年大阪連絡会、出産白書、大阪：国際婦人年大阪連絡会；1979
- 3) 江守陽子、前原澄子、東京都内における妊婦の分娩施設決定に関する考察 - 特に助産所での分娩を希望する妊婦の特徴について -、千葉大学看護学部紀要、1988；10：1 - 11
- 4) 大井けい子、大谷美和子、竹中美ほか、妊婦が望む出産のあり方 - 基本的欲求満足度の分析から見て -、自治医科大学看護短期大学紀要、1998；Vol 16：1 - 8
- 5) 笹伊久美子、二瓶良子、太田操、妊婦の主體的な出産に関する意識調査 - 出産場所選択と希望分娩様式 -、母性衛生、2002；43（1）：179 - 187
- 6) 前掲書4)
- 7) 早川有子、内藤和子、竹中美ほか、栃木県の妊婦の出産に対するニーズ：分娩方法・体位・処置、助産婦雑誌、2000；54（1）：72 - 77
- 8) 渡部尚子、島田三恵子、利用者の立場から見て望ましい出産のあり方に関する研究、平成11年度厚生科学研究（子ども家庭総合研究事業）報告書、1999；1 - 9